

SOUND SOLUTION
Rock Door

PRO SOUND誌 2009年2月号

Prosound Report

**Acousphere Live at モーション・ブルー・ヨコハマ
Bose L1 systemと
イヤモニターを組み合わせたステージ**

営業案内

- スピーカーの近くでも「うるさく無い音」、会場のどこでも「クリアに聞こえる音」、「ハウリングしにくいサウンド」。コンバクトで高品位、明瞭度の高い音響-PAを提供いたします。
- ホスピタリティとPro Audio技術のノウハウにより、音響施設の運用サポート・操作・管理をいたします。
- 数多くのAudio Visualの設備の設計・施工経験を元に、使いやすい、明瞭度のすぐれたシステムを構築いたします。

Sound Solution Company

ロックドア株式会社

160-0008東京都新宿区三栄町24番地 黒田ビル1F

電話03-5312-6939

FAX03-5312-6988

Http://rockdoor.co.jp

info@rockdoor.co.jp

Acousphere Live at モーション・ブルー・ヨコハマ Bose L1 systemと イヤモニターを組み合わせたステージ

Acousphere インタビュー

report by 甲田乃次 (ロックドア)



「Acousphere Live at モーション・ブルー・ヨコハマ」
(2008年10月29日)。ステージセンター後方に
「Bose L1 system」がセッティングされている

去る10月末、モーション・ブルー・ヨコハマにおいて「Bose L1 system」とイヤモニターを組み合わせたライブステージの試みが行なわれた。当日の出演は永らくイヤモニターをお使いのジャズギターデュオ、アコースティックファイア奥澤さん、清水さんのお二人とゲストヴォーカリストとして井出麻里子さんとの共演となった。

はじめに

「Bose L1 model I system」(以下、L1)とは、ポータブル・ラインアレイ・システムというのに相応しく、ツープイスからなるラインアレイ・スピーカーと250W×2のデジタルアンプ並びに入・出力端子を含むパワースタンド(PS1)からなり、オプションで2台まで増設可能な「B1」ベースモジュールとの組み合わせから構成されている。



特筆すべきはそのユニークな開発コンセプトにあると言える。

「L1」は、PAや楽器用アンプとしてだけでなく各ミュージシャンの後ろに配置することでモニタースピーカーとしての役割と演奏者自身が聴いているバランスをそのままにフロントフィルとして観客

席に伝えることができることである。

またL・Rの大型スピーカーから再生される音像定位とは異なり、たとえば少人数の編成では各自が1台セットすることにより自然な立ち位置からの音像定位が構築できる。

加えて、ラインアレイの特性としての

線音源の理論からハウリングに強く、空間の残響に影響を受けることも少なく、弱音楽器等の拡声に優れていると言える。

「L1」スピーカーのユニット構成は5.7cmドライバー×24本から成り立っているが、その特性は従来の“Bose サウンド”より中高域のスムーズさにあるといえる。

「B1」ベースモジュールはインピーダンス8Ω・13cmウーファー×2の構成ながら、2台用いたダブルベース・パッケージではかなりハードな楽曲やレゲエなどの構成まで十分対応可能であると感じた。

当日のステージセットの概要は、アコースフィアのお二方のギターからの信号をM-Audioのオーディオ・インターフェイスに入力し、その信号をPCのプラグイン・ソフトのエフェクターとペダルなどを経由してハウス送りとイヤモニターへの出力と「L1」への送りに振り分けられている。

ヴォーカリストの井出麻理子さんのマイクは同じくM-Audioのオーディオ・インターフェイスに入力され、公演中のMCマイクとしても使用されていたが、アコースフィアさんの演奏中にはアンビエント用のマイクとして、客席からの反応などの信号もイヤモニターに返すことも行っていた。

モーション・ブルーの会場側FOHシステムは「Meyer Sound UPA-1P」×2+「USW-1P」×1（片側）が常設されており、「L1」はステージ中央の奥側ホリゾンタルより約1mの位置に設置した。演奏者の立ち位置は「L1」より約2mの距離をおいた。

アコースフィア・ライブにおけるサウンドシステムのチューニング

アコースフィアさんのライブにおけるサウンドシステムのチューニングのやり方はギターの高い方の音から1音ずつ

Bose L1 model I system

■L1スピーカー●ユニット構成：5.7cmドライバー×24 ●質量：上部：6kg、下部：7kg (L1スピーカー上下分割時)

■PS1パワースタンド●定格出力：250W×2 (L1スピーカー用：250W、B1ベースモジュール用：250W) ●入力端子：Input (CH1・CH2)：XLR (バランス) / 標準フォン (アンバランス) コンポ端子、Line IN (CH3・CH4)：標準フォン (アンバランス)、インサート端子：Insert (CH1・CH2)：標準フォン (アンバランス、センド/リターン) ●出力端子：Line OUT (CH1・CH2)：XLR (バランス、+4dBu)、Bass Line OUT：標準フォン (バランス、4dBu、アンバランス、10dBu)、B1ベース出力端子：NL4 (スピーコン) ×1 ●外形寸法：W662×H130×D661mm (PS1単体) ●質量：16kg ●消費電力：1,000W ●電源電圧：AC100V・50/60Hz ●セットアップ時外形寸法：W662×H2106×D661mm ●総質量：29kg



弾いて行き、スケールを弾きながらピークがないか探っていく。また、コードを弾かれたときのバランスも重視され、かなりフラットな特性をターゲットにされていた。

モニター環境は日頃からお使いのイヤモニターの中でギターのバランスなど、出来上がった状態からサウンドチェックをスタートされるので、非常に作業が早いのと会場のフロントシステムをイヤモニターで聴こえる感じにピークを抑えて行くイコライジングが主たる調

整方法であったと言える。

ライブ後のインタビュー

Q. 「L1」をお使いになった印象はいかがでしたか？

奥澤 使う前に若干どんなシステムか勉強したのですが、実際使ってみて驚きました。僕たちは普段からイヤモニターを使っているのですが、ミュージシャンの多くは演奏しやすい音場を作るために物凄いエネルギーを使っていて、毎回違うスピーカーや環境でEQも違い



FOHシステムは「Meyer Sound UPA-1P」×2+「USW-1P」×1





奥沢茂幸 (g)

清水敏貴 (g)

ば会場の響きも違うというなかで、ライブの楽屋では今日はやり易かったとかやり難かったとか、お前の音が聴こえなかったとか、お客様に良い音が伝わっているかとか言う前に、ステージ上の音場を制御することが大切で、そこで我々はイヤモニターを選択した次第です。実際に「I1」を聴いてみて、ステージ上の各点においても均等に聴こえるのはイヤモニターと同じような感覚ですし、またギターなどの弱音楽器でもフィードバックを起こさないというのは大変な強みです、離れても、近づいても、耳の角度が変わっても聴こえ方が変わらないのはすごいスピーカープロダクトだと言えます。

清水 チューニングにおいて苦労しているのは、ミュージシャンだけでなくエンジニアの方々も同じところで悩んでいらっしゃると思うのですが、このシステムですとかなりまとまったところからスタートできるので、苦労しなくて済むと思います。

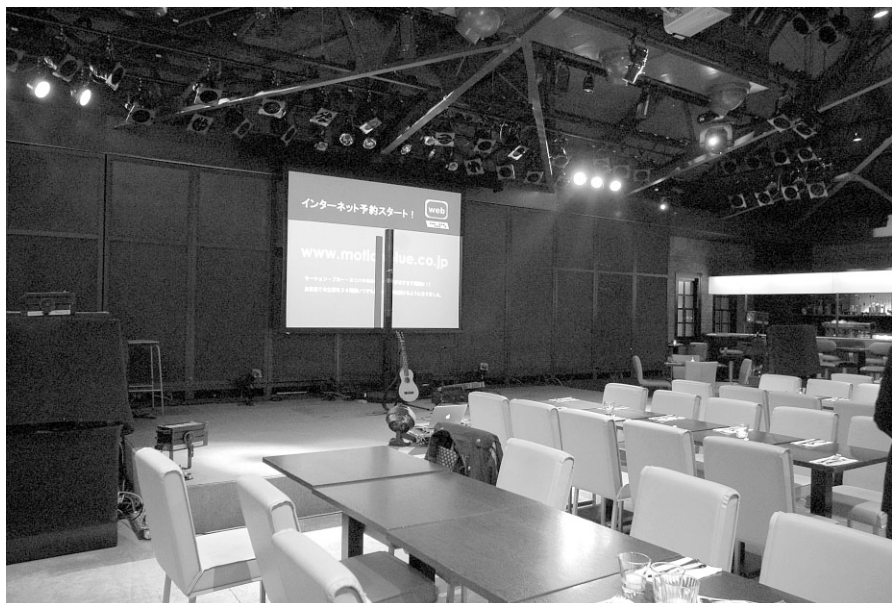
Q. 今回、モーション・ブルーのステージではモニターとしての役目とフロントフィルとしての役目を狙われていたようですが、その辺はどのように感じられ

ましたか？

甲田 今回はモーション・ブルーさんの既存の「Meyer Sound」のスピーカーも併用したのですが、ステージ上の音情報が豊かでまた整理されていたものですから、「Meyer Sound」はあまり上げなくて済んだと思います。また音像もきちっとステージ上に定位していて、お客様の集中度も高まったと感じています。本番中は会場内を聴いて回ることが難しかったのですが、それでもかなり均一なエネルギー分布だったと思います。

奥澤 僕たちの普段のシステムを説明しておきますと、まずイヤモニターを使

っているのですが、回線は普通にライブハウスのフロント送りと、あとフロントフィルに「Meyer Sound」の「UPM-1P」を微かに鳴らしているだけです、1本セットしています。しかしながら、ステージ上はほとんど無音なんですよ。響きの無い世界で…それはそれで緊張感のあるものなのですが、イヤモニターを使っているとステージ上はまるで異空間になってしまうんですよ。ところが、「I1」を入れてやってみたところ、背中から音の波動を感じて、それが客席の最前列のお客様にも伝わっているのが感じられて、安らいた感覚とステージ上にも微かな振動があるということはとても



モーション・ブルー・ヨコハマ

やり易かったです。なぜ僕らがイヤモニターを使うのかといえは、遠回りのようですが、会場のアンビエントなどもミックスに加えてお客様が聴いてくれるのと同じバランスを目標にモニタリングしたいからなのです。たしかに、前方から響いてくる方が聴覚特性からも聴き取りやすいとは思いますが、近寄っても、離れても芯のある音なのでモニタリングしやすく、違和感はありませんでした。

Q. 以前、イヤモニター送りはステレオでしたよね、現在はモノラルのシステムですが頭内定位で音像の広がり感が少なく、違和感はありませんか？

奥澤 確かにステレオの方が、空間感が得られるのですが、僕たちはギター2本のデュオなのでさほど気になりません。これが3人以上のアンサンブルなどの場合には、定位は必要になってくると思います。加えて目から入ってくる視覚情報も大きく関係していると思います。たとえば普段リードギターの清水君は僕の左手、ステージ上手側に位置しているのですが、ステレオで定位させていて、誤ってイヤモニターの接続を間違えて逆にしてしまった時には、感覚が狂って気持ち悪くなってしまいました。イヤモニターのミックスには必要に応じて、アンビエントを加えています。

Q. ハウス送りもモノラルですが、どう



スペシャルゲスト：井手麻理子 (vo)

してですか？

奥澤 現在、多くのライブハウスではフロントのスピーカーシステムをステレオ送りされていますが、僕らはどこの席でも同じようなバランスで聞いていただけたらと思っているんです。森さん、ライブハウスなどでもドラムのシンバル狙いで、エンジニアの方々は普通、L・Rのトップをバンポットで振っておられますけれどもいかがですか？

森(ロックドア) やはり一般的にステレオ定位させていますね。ステレオですと会場にもよりますが、客席の位置で聴こえ方のバラツキは出ると思います。

奥澤 僕らは、音でおもてなしをするミュージックエンターテイメントとして、会場の一部の客席だけを軸に音創りはしたくないのです。そこで自分たちで「Meyer Sound」の「UPM-1P」を1本、フロントフィルとして持ち込んで会場全体がバランスよく響くように努

めています。僕らが師事するタック&パーティも多くの時間をかけて丁寧に会場の各スピーカーのバランスをとって行きます。

さいごに

今回このような「I」の実験的なライブを行なったのですが、演奏途中に何回かイヤモニターを外して演奏してみました。とても安心して演奏できました。またイヤモニターを装着した状態においても、足の裏から感じるステージの振動は大変重要な要素で特にグレイブ感を出していくには、低域の心地よい振動は不可欠であると言えます。フロントフィルとしても最前列のお客様から、後方の客席、また指向特性が160°と広角であるためステージサイドの方までほぼ均等に響いていたと感じました。

本誌2008年6月号イヤモニターの安全を考えるにも提起されていたように、安全な聴こえに関する、衛生管理や正しい扱い方など先進的な事例に学び、イヤモニターやその他アプリケーションなど今後もいろいろと実験したいと思っております。



ギター・エフェクトはMacのプラグインを使用